

## 日本の「無縁社会」

——ソーシャル・キャピタルは再構築できるか——

武 富 拓 也

### 第一章 序論

現代社会は人と人の関係が希薄になったと言われる。2010年にNHKで放送された「無縁社会」はその最たる例であろう。無縁社会とは血縁・地縁・社縁が崩壊し、孤独になる社会であり共同体の崩壊とも言える（NHK 2010:1）。地域でのお隣さんどうしの助け合いは失われ、アパートやマンションの隣人にどんな人が住んでいるか全く知らないということも現代では珍しくない。

人と人のつながりを「ソーシャル・キャピタル」ということができる。アメリカの政治学者ロバート・パットナムによれば「ソーシャル・キャピタル(以下SC)」とは、ネットワーク、規範、信頼などが持つ社会生活上の特徴を示すものである。日本語で「社会関係資本」と訳されている(稲葉 2011:i)。ソーシャル・キャピタルが減少した、また失われたコミュニティを「無縁社会」と言い表せることができる。ではなぜ現代はつながりがないと言われる「無縁社会」になってしまったのだろうか。NHK報道プロジェクトから引用すると「家族の形態が変わってきたことです。かつての大家族から核家族となり、今や一人で暮らす人が急増する単身化の時代を迎えています。・・・また、ライフスタイルの変化もあります。コンビニがどこにでもあり、一人暮らしをしても、お金さえあれば、なに不自由なく暮らすことができる。ライフスタイルの変化は、人と人のつながりも希薄にしているのです」とある。(NHK 2015)。つまり、昔の古き良き社会ではまだ地域の縁が豊富にあり助け合っていたが、現代社会はそのつながりの部分をお金で補えるようになったということである。具体例をあげれば、昔は子供は地域や親族で見れていたが現代は保育園に預けたり、また家族内で行っていた介護も今は老人ホームにあずけられる。こういったもともとは人と人の縁で助け合いで担わ

れていた部分が市場化された結果、お金さえあれば一人でも生きていける社会になったといえる。

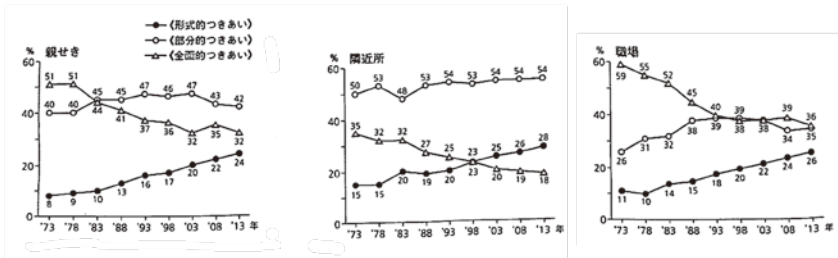
また現代人の無縁と治安への不安の相関を内閣府の調査から読み取れる。内閣府が行った「治安に関する世論調査」によれば、最近の治安は悪くなったと思うかという質問に、実に81.1%の国民が悪くなったと答えている。そして治安が悪くなったと思う原因に、地域社会の連帯意識が希薄となったからと答えた人が54.9%になっている。内閣調査によれば、やはり日本国民は人とのつながりが弱くなったと感じていることがわかる（内閣府2012）。内閣府の調査からわかることは国民の8割が治安が悪くなったと答え、その原因が地域の連帯意識が希薄になったからと国民は感じているということである。実際の治安は過去と比べて良くなっている。まだ縁があったとされる1950年の古き良き社会の殺人件数より現在は三分の一ほど少ない（浜井 2009）。となれば、無縁社会に再び縁を復活させればいいかという、そう話は単純なものではない。

NHKが1973年から2013年までの人間関係の付き合い方の調査をしたものがある。その調査内容は「親戚との付き合い」「職場の同僚との付き合い」「隣近所の人との付き合い」という3つの場を設定、そしてそれぞれの場に3つの選択肢を用意した。その選択肢は（1）形式的付き合い（2）部分的付き合い（3）全面的な付き合いを表す内容になっている。この3つは血縁、地縁、社縁の代表的な場である。図1より結果はいずれの場も＜全面的な付き合い＞は減少し、＜部分的な付き合い＞は横ばいであり、＜形式的な付き合い＞をした人が増えた結果となっている（NHK 2015：199）。

以上の先行研究からわかるように日本人は無縁社会を嘆いているのに、人との密接な付き合いは求めていない。現代社会は便利になり、地域のつながりに依存しなくても生きていけるようになったため人とのつながりで生まれた助け合いの機能はお金に補完されたとも言えるが、日本人が密接なつながりを求めなくなったというNHKの調査結果をみると、それだけが「無縁社会」の原因とは思えない。

そこで本論では、日本人は血縁や地縁という共同体が必要だと感じつつも密接なつながりを避けるという心理の齟齬が無縁社会を招いたという仮説を立て、これまでの日本がどのようにコミュニティを作ってきたかをSCのつ

図1 場による人間関係の付き合い方



(出典)NHK『現代日本人の意識構造』(2015:199)

なかり方の概念を用いて読み解くとともに、人とのつながり方での日本人の内面の変化から検証していく。さらに本論では仮説を検証した上で、ではどうやって失われたソーシャル・キャピタルを取り戻すかまで行いたい。

まず第二章ではソーシャル・キャピタルの概念について述べる。第三章では日本独自の血縁・地縁・社縁について考察し、第四章では無縁は嘆くがつながりを求めないという一見矛盾した心理を読み解くために世界と日本人の価値観の比較から論じ、第五章では前章から日本人というものを捉えた上で、地域のソーシャル・キャピタルを再構築する提言と具体的方法を述べる。第六章では今後の課題と結論を述べる。

## 第二章 ソーシャルキャピタルの概念と定義

この章ではソーシャル・キャピタルの概念について触れる。ソーシャル・キャピタルとは社会科学において比較的新しい分野の研究である。そこから日本語に訳すと「社会資本」や「社会関係資本」と訳される場合がある。多くの場合、「社会資本」は公共の水道・ガス・道路のハードなインフラを指したり、教育や社会保障といったソフトなインフラまで含まれることもある。一方で社会関係資本は人と人のつながりを科学したものの意味として使われる。本論文では後者の概念を使用する。しかし研究領域により定義は多岐にわたるため、ここでは英語をカタカナ表記しソーシャル・キャピタル（以下：SC）とする。

最初にSCの概念を提唱したのは、1916年アメリカ合衆国のウエスト

ヴァージニア州の学校監察官であったハニファンと言われる。ハニファンは地域自治のコミュニティ発展のためには「SC(善意、仲間意識、相互の共感、社会的交流)」の蓄積が必要であると考え、そのための投資も必要であると述べた山村：2010)。以降ブルデューやコールマンと続き現在の SC 論の発展に大きく貢献したパットナムへと続く。パットナムは「協調行動を容易にすることにより社会の効率を改善しうる信頼、規範、ネットワークなどの社会的仕組みの特徴」として SC を定義づけている(山村：2010)。本論文で扱う SC はこのパットナムの定義とする。

SC の構成要素は 3 つある。一つ目は互酬性の規範である。わかりやすく言えばお互い様、助け合いといった規範のことをいう。二つ目の要素は信頼である。SC では信頼は「人は一般的に信頼できる」という考えを表す「一般的信頼」と「長期間において付き合っている人だから信頼できる」という「個別的信頼」の二つに分けることができる。本論文で参照する社会心理学者の山岸は信頼社会と安心社会という区別をしており、一般的信頼を信頼社会と、個別的信頼を安心社会と位置付けていると考えられる。日本は安心社会であると山岸は述べる。3 つ目の要素はネットワークである。言い換えれば人と人のつながりといえる。コミュニティにおいてネットワークは 2 種類に分けられる。一つはボンディング型(結束型)のつながりである。その特徴は閉鎖的、排他的、相互扶助・相互監視、匿名性の低さである。もう一つはブリッジング型(橋渡し型)のつながりである。その特徴は開放型、流動的、独立性の重視、相互関心、当事者意識である(浦 2015)。結束型は内部のコミュニティのつながりが強く、互酬性の規範が機能し助け合いが起りやすい一方でしがらみという負の面も持つ。橋渡し型は結束も弱くしがらみの影響も少ない一方でつながりが必ずしも強くなく助け合いという互酬性の規範がうまく機能しない可能性がある。

以上 SC の三つの要素を紹介した。次章から日本社会のコミュニティ形成とそのソーシャル・キャピタルについて論じていきたい。

### 第三章 日本人の血縁・地縁・社縁

現代は無縁社会でかつての縁が失われてしまったというなら、かつての縁

とはどのようなものであったのだろうか。本章では日本の血縁・地縁・社縁を今一度問い直し、日本人のSCでいうところの日本人のつながり方の傾向を探っていく。

### 第一節 血縁と“イエ”とそのSCからみるつながり方

現代の日本社会は孤独死する人が増えている無縁社会である。それは血縁・地縁関係が弱まったことが理由になっている。しかし文献を探てみると日本人にとっての血縁や地縁のいろいろな側面が見えてくる。結論から述べればそもそも日本人が共同体を作るときは血縁を第一位に優先しているわけではなく、イエ社会としてもっとも重要なものであった。イエ社会は結束型で個別的信頼をもつSCだといえる。以下その理由を見ていく。

イエとは一般に考えられる家族・familyとは違う性格をもっており、田中の言葉を借りればイエとは生活を共同に行う経営体を意味するものであった。(田中:2011.3)日本のイエ社会の原初形態(原イエ)の発生は平安末期に発生したものとみられており、そして、イエは血縁関係を中心に構成されるものではなかった。イエ社会論について資料を引用する。

「一族・家子は原則として血縁で結ばれているが、全体としてみると、原イエは養子制度が広汎に採用されたという点で血縁集団とは言いがたいものであった。村上らは「日本のイエ型集団ほど、他人養子の制度を大幅に活用した例はおそらくほかにないであろう」とする。」(田中:2011)

つまり、イエ社会は超血縁性(血縁を超えた集団)の集団であった。これは養子嫡子を示している。もっと言えば家長の次は血縁の繋がった長男よりも養子を入れることがイエにとって適していれば血縁関係なく継がせるということでもある。イエは血縁関係を最も重要視しているものではないので、共同体内部の人間同士のつながりはもはや血縁では繋がっていないが共同体として成り立っている。中根千枝によればこれは経営体という枠の設定によって構成されている社会集団だという(中根1967:32)。

中国や韓国の家族制度は血縁を重視する強い父系共同体であり、少なくと

も超血縁性の集団ではなかった。このことから日本社会はイエが共同体として重視され、中国や韓国と比べても血縁関係は希薄であり、重要度で言えば二次的なものであったと言える。

上記のイエの論考を踏まえて、SCのつながりの概念を使いイエについて考えてみる。イエは一見血縁関係を超えて、外部からの人を入れているので橋渡し型のつながり方でオープンな組織を作っているように見える。しかし、中根は強固な枠で構成される社会は「ウチの者」「ヨソの者」というウチソトの概念が正面にでるとも述べる。生活をともにする経営体であるイエは血縁社会ではないのにそのように見える。山本七平はそのような社会を擬制の血縁社会であり血縁イデオロギーという。山本の言葉を引用する。

「血縁ではないがゆえに擬制であり、血縁のごとくに作用するための一種のイデオロギーになるわけだ」(山本 2006:48)

イエは擬制の血縁共同体をつくりながらも、血縁イデオロギー的な経営体の枠で集団を構成しており「ウチの者」「ヨソの者」を作り出しやすい性質を持つと言える。一見開けた橋渡し型SCのコミュニティに見えたイエであったが、実際は閉じた結束型SCと判断できる。

## 第二節 地縁とムラ社会

日本はかつて「ムラ社会」だった。ムラ社会だった頃の日本は地縁に溢れていたのであろうと考えがちだが、かならずしもそうとは言えない。ここで述べる「ムラ」と「村」は違う。「村」は行政村を意味しており、行政の単位として使われている。イエから構成されたものであり部落とも呼ぶこともできる。ムラ近くのものと同業を結ぶ地縁社会の性格よりも経営体としてのイエがつながる同業者団体という縁があったというほうがより近いといえる。

それでも、地縁社会に見えたのはムラ（同業者団体）の中にあるイエが近くにあっただけで、その証拠にムラを構成するイエが地理的に遠くにあることも少なくなかったとある。ムラは農村ならそこに属するイエはすべて農業者であり、漁村ならすべて漁業者であった。(岡 2015)

もちろん、ムラがイエを構成する同業者団体だったから地縁はなかったと

いうものではない。農業をする上で田んぼを使い、それは単一のイエが所有できるものではなく、隣のイエの同業者と共有しているものであった。つまり一つのイエが好き勝手に田んぼの水を調整できるものでなく（一つの田んぼへの行動が隣接する田んぼに影響するため）、そのためムラ（地域でなくイエの集合としての）全体の合意を取らなければならなかった。ムラ社会が一致団結しているように見えるのは、イエの人々の流動性が小さく特定の場所に定着せざるを得ないからだ。多数決で決まる民主主義的手続きをとれば、必ず少数派が生まれ、しこりが残る。流動性があればそのしこりも問題ないがムラの人の動きは固定的だ。またムラでは仕事が進んで行われるものなので、しこりはできるだけうまないほうがいい。なので、全員一致の手続きを踏むのである。このような有縁社会の原理を島田は「無所有」と「全員一致」とした（島田 2011：41-45）。

ムラが生きるための手段として機能していた頃は確かに有縁だったかもしれない。しかし、それは地縁に基づいたものではなかった。イエやムラは生きるための手段にすぎない。なので、近代による都市化が進みムラ共同体で生きて行くという以外の選択肢ができると、多くの人が都心に流出した。

これを島田は都市に流出したものの次男、三男が多いことに注目する。農地を受け継げない、次男や三男が生きるためのだけの土地は保障されるが、豊かな生活を送るには足りない状況が見えるムラにいるよりも、都市に可能性をもとめたと述べる（島田 2011：59-60）やむなくして、ムラから都市に出た人も一方、都会の魅力に惹かれ自らの意思でムラを出て、都市で生きることを決意したものもいると考えられる。ムラという有縁社会は個人で自立・独立という意識でなく、みんなで協力し共有しながら支え合って生きて行くという社会であった。一方で個人の自由はあまりない社会であるといえる。

### 第三節 社縁～都市のイエ社会～

ここまでの流れを見ると日本人は元来、血縁や地縁でコミュニティを作るというより、イエという日本社会独自と言われる共同体をつくり生きてきたことを見てきた。そんな日本人がムラ社会をでてどのような縁を構築してきたのだろうか。結論から言えば、都市でイエを構築したのである。

まったく無縁の都市でどのようにイエを構成したのであるうか。ここで中根の言葉を引用する。

「同質性を有せざる者が場によって集団を構成する場合、その原初形態は群れであり・・・それ自体社会集団構成の要件をもたないものである。これが社会集団となるためには、強力な恒久的な枠、たとえば・・・経済的要素の「イエ」や・・・企業組織・官僚組織などという外的な条件を必要とする」(中根 1967:36)

これはつまり会社の縁「社縁」を意味するものである。都市の中で縁から一度離れたものは会社という枠の中でイエを作り共同体となる。もちろん、都市で作られる共同体も、基にあるのはイエ社会なのでコミュニティのつながり方は結束型 SC で閉じたものである。それを可能にしたのが日本的雇用といわれる、年功序列や終身雇用制度だ。また社員の評価を決めるやり方も日本独自の方法をとる。アメリカでよく見られるのは担当する仕事によって決まる職務給であるのに対し、日本は従業員が持つ能力に応じて賃金が決まる職能給である。職能給には安定して働けるというメリットはあるが、そもそも能力を測る明確な基準はなく、個人が担当する仕事の量が曖昧であったり、それが原因で長時間労働、または自分の仕事が終わっても帰りにくい雰囲気になるなどの問題がある。(安藤 2015:115-116) この根本にイエとしての社縁という枠があると考えられる。

もちろん共同体は会社にあるので、住居の近くに住んでいるお隣さんとの地縁はあったとしても強固なものではない。山本はアメリカ・イギリスと日本を共同体の違いを述べる。アメリカとイギリスは共同体は血縁や地縁にあり、会社は機能集団(稼ぎの場)である。共同体にはある種の犠牲を払って奉仕する。が、一方血縁も地縁もそれほど強くない日本では社縁が共同体である。そのことについて山本はこう述べる。

「団地共同体から会社に出稼ぎに行っているのではない。逆であり会社共同体の寝の場所がたまたまその団地にあるに過ぎない。・・・会社共同体保持のために残業代返上という奉仕はしても、(共同体でない)団

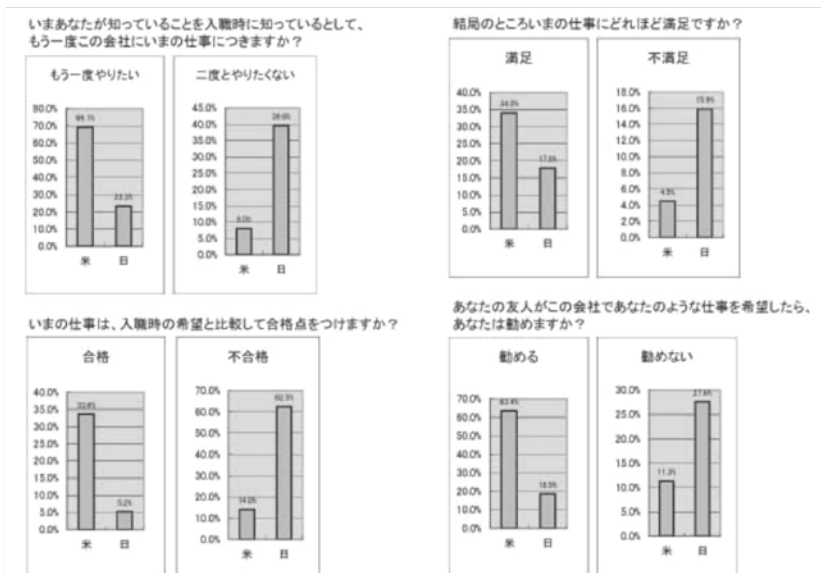


地のためには指一本動かすのもめんどくさいということになる」(山本 2006 : 71,75)

血縁や地縁はないわけではないとしても、都市のイエ共同体は社縁であった。しかし、会社の社員には定年退職があり、退職年齢を迎えれば自動的に会社からは追い出される。そして社縁も失う。

日本人の共同体は血縁・地縁で構成していたのではなく、一貫してイエ共同体を作っていた。近代以降はムラ社会から会社に場が移り変わる。けれども、共同体の仕組みはイエでそれにかわりはない。しかし、会社の中のイエ(社縁)は定年退職という制度があるのでずっとは所属することができない。社縁が失われれば、孤独に帰るしかない。現代の社会は高齢化社会であり、多くの人が退職した。結果、共同体を失った人々が大量に生まれ、孤独死がふえたと考えられる。血縁・地縁で共同体を作らず、その役割をイエ社会が担い、都市でも社縁というイエ社会を構成した時点で、日本人が高齢化とともにイ

図2 仕事意識の日米比較



(出典) 小池『日本産業社会の「神話」』2009 (注) 上のデータから橋玲がグラフ作成

エを失い共同体がなくなるのは当然の帰結だ。決して血縁関係や地縁が、現代社会になってから希薄なったわけではなかったのだということがわかる。が、退職後イエを失い、即無縁社会行きというのは話が単純すぎる。であるならば引退後新しいイエを作ることにはできないのだろうか。

図2は橘玲が小池の日米比較調査のデータをグラフ化したものである。日本人はもう一度この会社で働くかと聞かれると米国よりも4倍近くつきたくないと答え、仕事の満足度は米国の半分であり、友人にこの会社の自分の仕事を進めるか？という質問に勧めると答えた割合はアメリカの四分の一という結果になっている。この結果を見て橘は述べる。

80年代後半は日本はバブル期で絶頂の時代であった。一方アメリカは製造業を中心に大規模なリストラが続いていた時代だった。それでも、日本より米国の方が愛社精神があったと言える。(橘 2015)

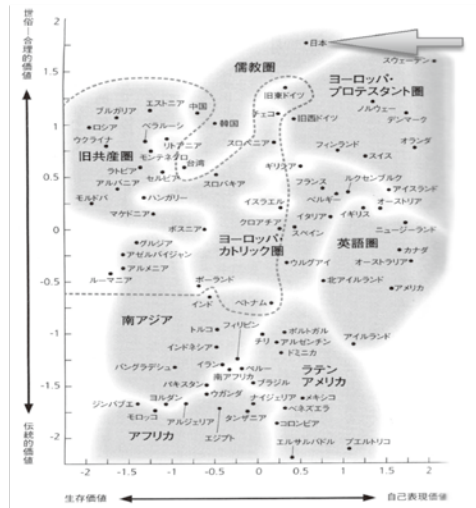
日本人のコミューティは一貫してイエ社会を土台としてきた。ムラ社会から離れ都市でも社縁を作った。しかし、バブル絶頂期ですら日本人は社縁（イエ）になんらかの不満を抱えていた。

#### 第四章 世界各国との比較で考える日本人の価値観

三章では日本人はイエというコミュニティを大切にムラだけでなく都市にもイエ社会を持ち込んだ。イエは血縁や地縁のつながりのない他者と共同体をつくる性格を持つ。そう言った共同体を大切にする日本人は和の精神を持ち集団を大切にしていると思われたところ、序論で述べた通り密接な関係を築く態度は減少し続け、ましてやバブル真最中の頃の社縁にあまり愛着をもっていないようであった。本章では日本人の価値観に焦点をあてその上記の謎を解いていきたい。

アメリカの政治学者ロナルド・イングルハートは世界各国の国民にアンケート調査をし、世界各国の価値観調査結果を出している。橘はイングルハートの調査結果をもとに日本人個人は各国と比べかなり世俗的（合理的）であると主張した。(橘 2012:134) 世界価値観調査の結果は図3であげている。

図3 世界の価値マップ



(出典) 橋本努『経済倫理=あなたは、なに主義』2008

縦軸に「伝統的価値（前近代社会の価値観）」と対になる価値観に「世俗 - 合理的価値観（近代社会の価値観）」をおき、横軸に「生存価値（産業社会の価値観）」と対になる価値観に「自己表現価値（ポスト産業社会の価値観）」がある。そのなかで日本の「世俗 - 合理的価値」は際立って高い位置にある。もちろん、このようなアンケートによりマッピングされた各国の傾向がいつでも当てはまるわけではない。しかし各国の人の価値観が経済成長に限らず、言語、宗教、地政学的な位置、歴史によって決まった形になることを示していると言える。

そして、橋はもう一つ、インゲルハートの調査を出し、日本人が世俗的なことを表すデータをつける。その調査とは「人生の目標について」だ。対象は日本、韓国、中国、アメリカの4カ国である。質問の内容は次の4つだ。(1)「親が私を誇りにおもうように努める」(2)「他人に迎合するよりも自分らしくありたい」(3)「友人の期待に応えたい」(4)「自分の人生の目標は自分で決める」である。この調査から日本人は親や友達の期待よりも、自分の人生の目標は自分で決め、自分らしくありたいと強く思っていることがわかる。この4カ国の中では、個人主義的人生の選択をしたいと思っている傾

向がとつてもつよく出ているのは日本人である。(橘 2009:138)

社会心理学者の山岸の調査からも日本人が個人主義的行動をとるという調査結果が出ている。山岸の実験では日米の学生が比較を通して検証が行われた。この実験ではグループのメンバーが知らない人同士、または実験中・後にも、参加者同士が顔を合わせないような状況で行われた。実験結果では、メンバーが顔を合わすことのない前提の状況では、日本人の学生はアメリカ人の学生に比べ個人主義的な行動をとることが確認された。(山岸 1999:34-37) では、日本人が集団主義という言葉はどのようなのであろうか。ここで山岸発言を引用する。

“集団主義的”な日本社会で人々が集団のために自己の利益を犠牲にするような行動をとるのは、人々が自分の利益よりも集団の利益を優先するところの性質を持っているからというよりは、人々が集団の利益に反するように行動するのを妨げるようなしくみ、とくに相互監視と相互規制のしくみが存在しているからだという観点です。(山岸 1999:45)

つまり、日本人が集団主義に見えるのは個人の内面からというよりも、周りの目を気にしているに過ぎないし、むしろ実験からは相互規制と相互監視を取り外せばアメリカ人よりも個人主義的な行動を示すといえる。

まとめると、日本人は内面の心理はイングルハートの調査と山岸の実験から集団主義的な傾向はなく（相互監視と相互規制によって集団主義的になっているに過ぎず）、世界的にみても世俗的で、少なくともアメリカ・中国・韓国よりも個人主義的な行動をする傾向があるということが見えてきたといえる。

## 第五章 これまでの考察からの仮説検証と提案

第三章と第四章の考察から仮説検証を行う。また、日本のSCの再構築への提案を行う。

## 第一節 仮説検証の結果

ここで第三章と第四章の考察から、「無縁社会」が生まれたのは、日本人は血縁や地縁という共同体が必要だと感じつつも、親密なつながりを避けるという心理との齟齬が無縁社会を招いたという仮説の検証を行いたい。

実際には日本の共同体は血縁・地縁を中心にした共同体ではなく、ムラ社会から都市にかけて一貫してイエ社会を中心にした共同体であったと述べた。イエ社会は結束型 SC で相互監視・相互規制の性質を持ち、血縁・地縁の関係ないものを共同体にするための経営体や経済組織などの外的な条件を必要とし、それが強力な枠として機能した。その強力な枠があったからこそ、世界の価値観と比べてみても合理的で個人的傾向を内包する日本人をイエ共同体として社会集団にまとめることができたのである。具体的に近代以降のイエ社会を述べるなら、それは社縁だ。しかし社縁は定年退職年齢になると会社という共同体から追い出されてしまう。そして血縁も地縁も弱い日本人は共同体を失う。

しかし、定年退職した後の人生は長い。長く所属した社縁を失ったからとはいえ、もう一度作り直せばいいだけであるし、不可能ではないはずだ。ここで思い出してもらいたいのは、序章で述べた通り、日本人で親密な関係を求める人が減少しており、より形式的なつきあいを求めている人が増加しているということであり、そして、第三章ではバブル絶頂期にあった社縁としての会社にもポジティブな印象を持っていなかったということである。

つまり、日本人は傾向的に決してイエ社会を全面肯定しているわけではないことがわかる。なぜなら強力な枠も性質的に持ち、結果親密な関係を求めるイエという共同体の作り方と日本人の求める人との付き合い方とはマッチングしていないからである。また日本は豊かになり、年金や介護などの社会保障制度も充実したため、生きていくためにイエ共同体に必ずしも属する必要は無くなった。結果、引退し社縁を失ったひとは共同体に属するという選択をしなかったと考える。これを本論の検証結果とする。

## 第二節 枠でつながらない社会の提案

日本では親密なつきあい方を志向する人が減少していると述べたが、それは人とのつきあいを拒んでいるわけではない。イエ社会のように共同体をつ

くり結束型 SC の強いつながりの共同体でない集団があってもいいはずである。この点から日本のコミュニティのつながりを考えていく上で、重要となるのは結束型 SC よりも橋渡し型の SC のほうであると考ええる。

そこで本節では、橋渡し型 SC のコミュニティの好例であると考えられる自殺予防因子の研究で博士号を取得した岡の『生き心地の良い町』で紹介された徳島県旧海部町地域を参考に、橋渡し型コミュニティについて考察する。

岡檀は自殺をテーマに研究をしており、特に自殺多発地域の自殺危険因子（自殺の危険を高める要素）ではなく、自殺希少地域における自殺予防因子の調査をし、その研究対象地域に選ばれたのが徳島県旧海部町（旧海部町であるが本論では海部町とする）である。海部町は全国 3318 市区町村のなかで海部町は 8 番目に自殺率の低い自治体であり、上位トップ 10 のうち海部町以外は島であり、海部町は島以外を除けば実質 1 位であった。

岡の研究によると海部町の自殺予防因子は 5 つみつかった。（1）いろいろな人がいてもよい（2）人物本位主義をつらぬく（3）どうせ自分なんて、と考えない（4）「病」、市に出せ（5）ゆるやかにつながる（監視ではなく関心）。この 5 つの要素を SC のネットワークの構成タイプと比較してみよう。SC のネットワークには二つのタイプがあった。一つ目はボンディング型（結束型）でその特徴は閉鎖的、排他的、相互扶助・相互監視、匿名性の低さである。二つ目はブリッジング型（橋渡し型）でその特徴は開放型、流動的、独立性の重視、相互関心、当事者意識である。今までの日本社会は結束型のつながりをする方が多数であったが、海部町はどうやら橋渡し型のつながりであると推測できる。以下詳細に追っていく。

#### （1）「いろいろな人がいてもよい」

これは橋渡し型では開放型にあたる。海部町では小中学校の特別支援学級クラスのおくことは昔から反対しており設置されていない。住人は「いろいろな人がいるんじゃない。ってか、いろいろな人がいてもいいじゃん。むしろ、いろいろな人がいたほうがいいじゃん」と述べていることをデータとしてあげられており、また、その前提として、自分ひとりが他と違った行動をとったとしても、それだけを理由に周囲から特別視される、またはコミュニティから排除されるという心配がないのではあるまいかと岡檀は述べる。

#### （2）「人物本位主義をつらぬく」

人物本位主義とは、「職業上の地位や学歴、家柄や財力などにとらわれることなくその人の問題解決能力や人柄を見て評価する」ということをさして使われる。例では海部長の教育長を決める場が出されている。一般的には教育業界で長いキャリアを積んだ者が選任されると思いがちだが、選任されたのは、「これからの教育は企画力だ」という海部町の市民の考えに基づき、商工議所に勤務していた41歳の、教育業界でのキャリアのない人物だという。

### (3) 「どうせ自分なんて、と考えない」

あなたは「自分のような者に政府を動かす力はない」と思いますか。この問いに対して海部長は26.3%であったのに対し、自発多発地域である海部長お隣のA町では51.2%と二倍近くあり、二町間の差が大きいことがわかったとある。つまり、海部長の住民の多くは自己信頼感が高いのではないかと岡氏は主張する。結果、社会への参加率が高くなるのだ。橋渡し型の当事者意識に置き換えられる。

### (4) 「病」、市に出せ

困りごとがあれば無理しない、深刻化する前に早めに出しなさいということである。小さな困りごとであれば手を差し伸べられる。だから取り返しのつかない事態になる前に周囲に相談せよ、という海部町の教えであるということだ。これはボンディング型の互酬性の形なのかもしれない。一般的にボンディング型SCは互酬性の規範が弱いと言われるが、小さな困りごとを共有し問題が深刻になる前に予防するのである。

### (5) 「ゆるやかにつながる」(監視ではなく関心)

結束型とボンディング型の大きな違いである相互監視対相互関心を大きく表している点と言える。自殺多発地域であるA町と海部町にアンケートで近所付き合いについての調査をするために対し、「日常的に生活面で協力し合っている」と質問した。A町では44.0%、海部町が16.5%と回答した。海部町での付き合い方は「立ち話」「あいさつ程度」の回答が多数を占める。かなり淡白な付き合いをしていることがわかる。監視というほどまでの濃さはないが、完全に関係ないというほどまで付き合わないと言うわけでもないということだ。(岡 2013)

以上の5つの点からも、海部町は橋渡し型SCの好例であると言える。ま

た親密なつながりよりも形式的または部分的なつながりを志向する傾向にある日本人にとって、共同体まではいかないまでも、ゆるやかにコミュニティを形成する海部町はとてもよい先行事例であると考えられる。むしろ海部町の実例からみれば、地域の縁は強い方がよいという考え方への反証するものでもあり、それもまた大変興味深い。

## 第六章 今後の課題と結論にかえて

今後の課題はインターネット上に存在する、またはそれを介するネットコミュニティにおける SC の考察である。また現代社会の人間関係構築に切っても切り離せないコミュニケーション手段がインターネットを使用した SNS である。ある例として、ツイッターを通して全く見知らぬ人と好きでつながるといった今までにない SC の構築や、興味が合う人とコミュニティを作るネットサロンという広がりも見せている。いよいよ、血縁や地縁を超えたつながりが当たり前になってきていると言えるのではないか。

無縁社会は現代社会ではネガティブに捉えられることがほとんどである。無縁社会とは言い換えれば誰にも縛られず自由な社会と言える。もちろん、無縁社会を全面肯定しているわけではなく、貧困や援助がなかったという理由で孤独死するなどの問題は社会が是正していく課題だと言える。

一方で、無縁社会とはイエ社会の枠にとらわれていない社会とも言える。それは初めて縁が選択できる時代に到来したということではないか。橋渡し型 SC のコミュニティに所属してもいいし、本論では触れることができなかったインターネットを介した新しいコミュニティの形成を模索しながら SC をつくってもいい。もちろん、イエ社会のような結束力の強い共同体に属したいのであればそれもまたいい。私が重要だと考えることはコミュニティの形成・所属は様々な形があってもいいし、自由に選択できるべきだ。社会から強制的に決められるものではない。無縁社会に対する多くの問題はその過度期による問題であるかもしれないし、無縁社会は、人と人のつながりを再構築する機会、換言すればソーシャル・キャピタルを再構築する機会を提供したと考えることができるのではないだろうか。



### 参考文献

- 安藤至大 (2015) 『これだけは知っておきたい働き方の教科書』 ちくま新書  
稲葉陽二 (2011) 『ソーシャル・キャピタル入門 孤立から絆へ』 中公出版  
岡檀 (2013) 『生き心地の良い町』 講談社  
橘玲 (2009) 『(日本人論)』 幻冬舎  
中根千枝 (1967) 『タテ社会の人間関係論』 講談社  
橋本努 (2008) 『経済倫理 = あなたは、なに主義』 講談社  
浜井浩一 (2009) 『2円で刑務所、5億で執行猶予』 光文社新書  
山村靖彦 (2010) 『地域福祉とソーシャル・キャピタル論の接点に関する考察』 Bulletin of Beppu University Junior College  
山本七平 (2006) 『日本資本主義の精神』 ビジネス社  
NHK「無縁社会プロジェクト」取材班著 (2010) 『無縁社会 “無縁死3万二千人の衝撃”』 文藝春秋  
NHK(2015) 『現代日本人の意識構造』NHK 出版

### 参照ウェブサイト

- 岡知史 ムラの倫理 <http://pweb.sophia.ac.jp/oka/papers/2007/muranoronri.pdf> (2015年12月2日アクセス)  
ソーシャル・キャピタルの形成と犯罪防止に関する研究 <http://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/police/041-herasou-ura.html> (2015年12月1日アクセス)  
橘玲 日本人はなぜ自殺するのか? <http://www.tachibana-akira.com/2010/12/1306> (2015年12月3日アクセス)  
内閣府政府広報室 「治安に関する特別世論調査」の概要 <http://survey.gov-online.go.jp/tokubetu/h24/h24-chian.pdf> (2015年12月1日アクセス)  
NHK [http://web.archive.org/web/20120110101955/http://www.nhk.or.jp/asupro/life/life\\_06\\_03.html](http://web.archive.org/web/20120110101955/http://www.nhk.or.jp/asupro/life/life_06_03.html) (2015年12月1日アクセス)